

2026年秋期画像生成AIの技術性能および知財実務適合性に関する比較評価報告書：

Nano Banana 2.1とGPT Image 2.5の分析

Gemini 3.8 Flash

1. 概要と開発思想の差異

2026年秋、生成AI技術のフロンティアを担うGoogle DeepMindとOpenAIの双方は、画像生成および編集領域における次世代基盤モデルを相次いで市場へ投入した。Google DeepMindが2026年10月に公開した「Nano Banana 2.1」¹と、OpenAIが2026年9月に投入した「GPT Image 2.5」²は、従来の単一プロンプトによる写実的画像生成の枠組みを超え、長文脈理解、複数画像にわたる主体の同一性保持、精密な局所編集、そして外部知識とのグラウンディング（知識接地）を高度に融合させている点に技術的特質がある¹。

両モデルの根底にある設計思想には明確な差異が観察される。Nano Banana 2.1は、Googleのマルチモーダル基盤モデル「Gemini 3.6 Flash」をアーキテクチャの土台として直結させており、最大100万トークンのコンテキストウィンドウを備えたネイティブなマルチモーダル推論エンジンとして稼働する¹。生成前に構図や論理的関係を内部検証する「Thinkingモード」や、Google検索エンジンとのリアルタイム連携を標準で統合しており、事実の正確性が問われるダイアグラムやインフォグラフィックの構成に重きを置いている³。

一方のGPT Image 2.5は、OpenAIが画像生成・編集の実行パイプラインを抜本的に再設計したモデル体系である²。対話環境「ChatGPT Images 2.5」における直感的なユーザー体験の刷新と並行して、API層では高速処理・大量反復に特化した「Flare」と、極限の質感描写および編集精度を追求した「Sunburst」の二系統にモデルを分離・提供している²。手描きスケッチからの画像具体化やアルファ透過背景の直接出力など、グラフィックデザインや実務制作のワークフローへ直接組み込むための実用性に焦点を当てたアプローチを採用している²。

2. コア仕様および生成・編集性能の徹底比較

両モデルの基本仕様、解像度、参照制御、およびAPIレイテンシ・コスト構造の比較は以下の通りである。

基本仕様・性能指標の構造比較

評価項目	Google「Nano Banana 2.1」	OpenAI「GPT Image 2.5」
開発元・正式リリース	Google DeepMind (2026年10月) ¹	OpenAI (2026年9月) ²
基盤アーキテクチャ	Gemini 3.6 Flashネイティブマルチモーダル推論 ¹	GPT-Image-2.5 (Flare / Sunburstの二系統編成) ²

最大出力解像度	1K / 2K / 最大4K(ネイティブ対応) ⁵	1K / 2K / 最大4K(3840×2160等、6段階の品質設定) ²
アスペクト比対応	柔軟(1:4、4:1、1:8、8:1等の極端な比率でも破綻を解消) ³	任意指定可能(カスタム縦横比対応) ²
アルファ透過(透過背景)	外部ポストプロセス依存 ¹⁰	ネイティブ透過対応(PNG/WebPアルファチャネル直接出力) ²
参照画像サポート	最大14枚(被写体4体、オブジェクト10個の同一性維持) ⁴	最大16枚(被写体の構造・質感維持、非変更箇所の固定) ²
推論・思考制御	構成可能なThinkingレベル(minimal / medium / high) ³	モデル選択(Flare: 高速 / Sunburst: 高精度推論) ²
グラウンディング	Google Web検索・画像検索のリアルタイム接地 ³	ChatGPT ThinkingモードでのWeb検索連携 ⁶
APIコスト(標準目安)	1K: 約 0.0336 /2K : 0.0504 / 4K: 約\$0.0756 ¹⁰	トークン課金(画像出力 30/1M トークン、1024 0.04~\$0.053) ¹⁶
主なUI連携機能	Geminiアプリ、Google AI Studio、Flow、Stitch ¹	ChatGPT Sketch(手描き下絵)、Templates、画像注記 ²

生成品質・プロンプト忠実度・解像度の差異

Nano Banana 2.1は、Gemini 3.6 Flashのマルチモーダル推論能力を背景に、長大な指示文に含まれる構成要素間の論理的依存関係を正確に解釈する¹。特にThinkingモードを適用した場合、構図配置、色彩の対比、文字情報のレイアウトを生成前に内部で構造化するため、インフォグラフィックの正確性スコアが前世代モデルの0.179から0.521へと約2.9倍に向上している³。また、1:8や8:1といった極端なアスペクト比においても、高解像度化に伴うタイリングアーティファクトの発生が抑えられており、パノラマ的な図面展開や長大な工程フローの描写に適している³。ただし、Google DeepMindのモデルカードに示されている通り、1K解像度における極小文字列の滲みや、左右の幾何学的配置を取り違える空間推論の誤認が既知の課題として残されている⁵。

これに対してGPT Image 2.5は、局所的な境界線のシャープネスや工業素材の質感表現において一段高いレンダリング精度を提示する²。Sunburstモデルは3072ピクセル以上の大判サイズ出力においても、微細な切削面や複雑なテクスチャを高周波成分まで正確に分離して描画する能力を持つ⁷。特筆すべき機能として、APIからのアルファチャネル付き透過画像直接出力が挙げられ、生成物をレイアウトや背景画像へ合成する際の手動ロトスコープ作業を完全に排除できる²。プロンプト忠実度

においては、指示した要素の変更を行いつつ指示外の領域の画素構造を厳格に保つ「非破壊性」に優れており、指示の意図が局所にとどまる場合の安定性が高い²。

編集機構とマルチ画像一貫性

反復修正を前提とする実務環境において、編集時の一貫性は作業効率を左右する要素である。Nano Banana 2.1は最大14枚の参照画像を入力可能であり、最大4体のキャラクターと最大10個の独立したオブジェクトの同一性を同時に管理するマルチイメージ合成をサポートする⁴。これにより、別個に用意した複数の部品参照から複合的な装置構成を組み立てる処理を得意とする³。反面、モデルカードにも示されている通り、編集を重ねる過程で元画像の構図や被写体のポーズを不必要に引きずる「Persistent Subject Pose」の傾向が見られ、大幅なアングル変更には再生成を伴う調整を要する場合がある⁵。

GPT Image 2.5は最大16枚の参照画像を扱えることに加え、手描きスケッチを起点とする「Sketch」機能や画像上への直接ピンポイント指示を統合している²。特定箇所のみの変更指示を出した際、未指定領域の色彩や幾何形状が変形してしまう「ドリフト現象」の蓄積が極めて低く抑えられており、反復的な局所修正を行っても全体の構造的整合性を破綻させずに維持できる²。

3. 法的基盤とガバナンス：著作権・権利侵害補償・データセキュリティ

企業ユース、とりわけ知的財産権を取り扱う部門においては、モデルの出力品質と同等以上に、法的リスクの所在、著作権の帰属、および秘密情報の漏洩防止機構が問われる。

法的論点・ガバナンス要件の対比

ガバナンス項目	Google「Nano Banana 2.1」	OpenAI「GPT Image 2.5」
出力物の権利帰属	規約上、生成物に関する権利をユーザーに譲渡・許諾 ²¹	規約上、生成物に関する一切の権利・権原をユーザーに譲渡 ²¹
生成物の著作物性	AI単独生成物は法的に著作権不成立（日米共通見解） ²¹	同左（創作的寄与・表現の選択が必要） ²¹
知財侵害補償制度	Google Cloud Generative AI Indemnification（法人向け） ²⁴	Copyright Shield（Business / Enterprise / API向け） ²³
補償の除外事由	侵害を知り得た場合、安全制御の迂回、出力の改変、不当なプロンプト入力 ²³	出力の改変、安全機能不使用、無権利素材の入力、ポリシー違反 ²³
データ保持と学習利用	Google Cloud / Workspace / Gemini API利用時はモデル	APIデフォルト非学習、適格エンタープライズにZero Data

	学習に非利用 ²⁴	Retention (ZDR)提供 ²⁸
真正性・透かし技術	SynthID(不可視デジタル電子透かし)を全画像に埋め込み ⁶	C2PA規格準拠メタデータ + SynthIDのハイブリッド付与 ⁶

著作権帰属と侵害補償の法理的境界

日米の現行法制下において、AI単独で自律生成された画像には原則として著作権が発生しないという法理が定着している²¹。米国ではThaler v. Perlmutter判決において人間の創作的寄与(Human Authorship)を欠く生成物の著作物性が否定され、最高裁判所が上告を退けたことでこの法理が確定した²¹。日本法下においても文化庁の指針に基づき、利用者が著作物性を主張するためには、単なるプロンプト指示を超えて、構図の決定、素材の配置、加筆修正など創作的意図と創作的寄与を証明する必要がある²¹。

第三者の知的財産権(著作権・商標権・意匠権)に対する侵害責任について、両ベンダーは法人向け有償契約を対象とした補償制度を設けている²³。Googleは「Generative AI Indemnification」を通じてモデルの事前学習データに起因する請求と出力物に起因する請求の双方を防御対象として明記している²⁴。OpenAIは「Copyright Shield」により、顧客が第三者から提起された著作権侵害訴訟の防御費用および損害額を負担する体制をとっている²³。

ただし、これらの補償条項には厳格な免責規定が設定されていることに留意する必要がある²³。特定の商標名、既存キャラクター名、著名作家の固有名詞をプロンプトに指定して意図的に類似表現を誘発した場合や、ベンダーが提供するセーフティフィルターを意図的に迂回した場合、さらには生成された出力を外部ソフトウェアで改変した後に公開した場合は、いずれも補償対象から除外される²³。また、ユーザー自身が権利を有していない第三者の画像を参照データとして入力した場合も補償の適用外となるため、生成プロセスの透明性と入力データの適法性管理が不可欠である²³。

機密保持とZero Data Retention (ZDR) の重要性

出願前の未公開発明、意匠案、商標候補を生成AIに入力する場合、絶対的な秘密保持性が担保されなければならない。入力データが基盤モデルの再学習に流用された場合、特許法上の新規性喪失(公然知得・公然実施リスク)や営業秘密としての保護要件の喪失に直結するためである²⁷。

OpenAI APIは商用利用規約において入力データの学習利用を排除しており、さらに適格なエンタープライズ顧客向けには、プロンプトおよび生成出力をサーバー側で永続化しない「Zero Data Retention (ZDR)」および「Private Safety Processing」を提供している²⁸。Google Cloud(Vertex AI)および企業向けGemini APIにおいても、顧客データは論理的に隔離され、モデルのトレーニングデータとしては一切利用されない²⁴。知財実務においてこれらモデルを採用する際には、無料版コンシューマーUIの使用を厳格に禁止し、データ保持および再学習が法的に遮断されたエンタープライズ契約またはAPI環境を経由させることが前提条件となる²²。

4. 知財業務における具体的ユースケースと適合性評価

知的財産部門の実務プロセスにおいて、画像生成AIが寄与する代表的な4つの領域について、両モデルの技術適合性を比較・分析する。

特許図面(線画・断面図・符号配置)の作成補助

特許出願の図面作成(USPTO 37 CFR 1.84や各国の特許法施行規則)には、均一な黒の単線(線幅

0.3～0.7mm)、原則として陰影(シェーディング)の排除、断面を表す正確なハッチング、引き出し線による参照符号の整然とした配置といった厳格な形式要件が存在する³³。

Nano Banana 2.1は、Gemini 3.6 Flashの言語理解力を背景に、特許請求の範囲(クレーム)の構成要件や処理工程の説明文から、システムブロック図やフローチャートなどの論理構造図をワンショットで概念化することを得意とする³。しかし、特許図面に不可欠な微細な参照符号の配置において、数字の重複や脱落といったハルシネーションが発生しやすく⁵、線幅の厳密な均一性を制御することには限界がある。

一方のGPT Image 2.5は、手描きの下絵を「Sketch」機能に入力することで、弁理士や発明者が手描きした粗い構想図を破綻のない清書画像へと誘導する作業に適している²。加えて、Sunburstモデルのシャープな輪郭描画とネイティブ透過背景(Alpha Channel)出力を活用すれば、個別の機械構成要素や電子部品を単体パーツとして背景なしで生成することが容易である²。

ただし、両モデルの出力はいずれもラスター画像(PNG/JPEG等)であるため、そのまま特許庁への正式出願用図面として提出することは現実的ではない。実務上は、AIによって生成された概念図を中間プロトタイプとして位置づけ、ストロークベースのパスを再構築するAIベクター化ツール(PatentFig AI等)を用いてDXFやSVG形式に変換した上で、CADソフトウェア上で正規の参照符号および引き出し線を付与するパイプラインが求められる³⁴。なお、米国特許商標庁(USPTO)の2026年改定基準においては、AIを図面作成等の支援「ツール」として使用すること自体は禁止されておらず、人間が出願内容の着想(Conception)と正確性を検証していれば出願適格性に疑義は生じない²⁷。

意匠登録出願における六面図・幾何学的整合性の検証

意匠実務においては、保護対象となる物品の立体形状を一義的に特定するため、直交投影による六面図(正面・背面・平面・底面・左側面・右側面)および斜視図の間で幾何学的寸法が厳密に一致していなければならない。

現状の2D拡散ベースの生成アーキテクチャでは、Nano Banana 2.1およびGPT Image 2.5の双方が、プロンプト指示のみから寸法整合性の取れた完全な六面図セットを自律生成することに技術的な制約を抱えている。Nano Banana 2.1はモデルカードにおいて三次元推論および左右の幾何学的認識に限界があることが明記されており⁵、異なるアングル間で微細な段差や比率の不整合が生じやすい。

GPT Image 2.5(Sunburst)は、非変更箇所の固定能力に優れるため、参照画像を固定した上でわずかにアングルを回転させたバリエーションを生成する反復制御においてはNano Banana 2.1よりも安定した挙動を示す²。しかし、意匠登録の登録査定に耐えうるレベルの図面間寸法一致を担保することは依然として困難である。

したがって意匠実務においては、AIモデルを意匠コンセプトの大量創出や関連意匠(バリエーション意匠)の探索に限定して活用し、採択されたデザインを2D-to-3Dモデル生成ツール(Meshy AI等)やCADツールに受け渡して三次元データを構築した上で、CADから正規の直交投影六面図をレンダリングする運用が実務上の合理解となる³⁸。また、USPTOの2026年3月意匠AI公報が指摘するように、AI生成物を意匠として具体化するにあたっては、人間の創作的関与(プロンプト履歴、スケッチ、採択ログ)を保全することが将来の無効審判対策として極めて重要である³⁶。

商標・ブランドロゴ・パッケージデザインの創出とクリアランス

ブランド保護および商標実務において、シンボルマーク、結合商標、トレードドレス、製品パッケージの意匠検討は、画像生成モデルの能力が直接的に発揮される領域である。

Nano Banana 2.1は、GoogleのWeb検索および画像検索によるリアルタイム・グラウンディングを活用できるため、市場に実在するデザイントレンドや競合の意匠傾向を反映したパッケージモックアップを効率的に試作できる³。また、画像内テキストの描画能力が向上しているため、多言語の成分表示や注意書きを含めたパッケージ全体のレイアウト検討において高い実用性を示す³。

対してGPT Image 2.5は、ChatGPT上で提供される「Templates(ロゴやポスターのひな型)」や、タイポグラフィの幾何学的な均一性において優れた描画精度を誇る²。特に商標出願を視野に入れたロゴデザインの検討において、フォントの破綻やノイズの混入が少なく、視認性の高いシンボルマークを生成できる点で一日の長がある⁷。

ただし、いずれのモデルを用いて生成された商標候補であっても、学習データ内の既存商標と偶発的に類似するリスクは排除できない²²。商標出願を決定する前段階において、特許情報プラットフォーム(J-PlatPat)や各国商標データベースを用いた類似群コードに基づく文字・図形商標検索、ならびに画像類似検索によるクリアランス調査を経由させることが不可欠である⁴⁰。

先行技術文献の可視化と技術思想の直感的理解

侵害訴訟、無効審判、あるいは社内鑑定実務において、数十年前に出願された先行特許文献の難解な文章表現や不鮮明な公報図面から、具体的実施形態の構造を立体的に復元・可視化する作業は知財担当者にとって大きな負荷を伴う。

この領域においては、Gemini 3.6 Flashの推論能力と100万トークンの長文脈窓を背景に持つNano Banana 2.1が顕著な優位性を発揮する¹。先行公報の請求項や実施例の詳細な記述をそのままプロンプトとして投入し、Thinkingモードを介して物理的配置や機構の動作を視覚化させることで、物理的矛盾の少ない構造説明図を生成することが可能である¹。歴史的な技術背景に即した描写能力も備えており¹、先行技術の「技術思想(Inventive Concept)」を審査官や裁判官に対して直感的に伝達するためのプレゼンテーション資料作成において、強力な省力化をもたらす。

5. 課題と知財部門における導入戦略・提言

Nano Banana 2.1とGPT Image 2.5は、それぞれ推論主導の知識統合型モデルと、編集精度を極めた制作主導型モデルという異なる技術的ピークを示している。知財部門がこれらを業務プロセスへ安全かつ効果的に組み込むための導入戦略として、以下の3点が導かれる。

第一に、知財業務のタスク特性に応じたモデルのハイブリッド運用である。先行技術文献の長文テキストを読解して機構を可視化する作業や、システムフローおよび処理工程の概念図作成、さらには検索接地を活用したパッケージの市場性検討には、Nano Banana 2.1を優先的に配備するのが合理的である¹。APIコストが1Kあたり約\$0.0336と低廉であるため、初期アイデアのスクリーニングにも適している¹⁰。一方で、発明者自身の手描きスケッチを忠実に具体化する作業や、Sunburstのアルファチャネル透過を用いた機械部品パーツの個別切り出し、承認済みデザインの細部のみを反復修正する意匠バリエーション探索には、GPT Image 2.5を適用することで高い作業再現性が得られる²。第二に、CADおよびベクター編集ツールとの役割分担の明確化である。両モデルともに、特許庁の図面形式要件が求める均一な単線(0.3~0.7mm)の維持や、意匠出願に耐えうる直交投影六面図の厳密な幾何整合性を単独で完結させることはできない⁵。知財部門は生成AIを「出願用図面の最終出力ツール」ではなく、「中間プロトタイプの創出エンジン」と定義し、後段のベクター化ツールや3D CADソフトウェアと接続するパイプラインを標準化すべきである³⁴。

第三に、厳格なデータガバナンスと創作プロセスのエビデンス保全である。未公開発明や未登録意匠を取り扱う実務においては、コンシューマー向け環境の利用を遮断し、Zero Data Retention(ZDR

）または再学習遮断が契約上保証された法人向けAPIやエンタープライズ契約の利用を義務付ける必要がある²⁷。同時に、日米の法制度下においてAI単独生成物の著作権が否定され、かつ特許・意匠の適格性判断において人間の着想が厳格に問われる現状に鑑み、プロンプトの投入履歴、中間スケッチ、および人間の関与による修正プロセスの版管理ログを永続的に記録・保管する運用体制を確立することが極めて重要である²¹。

引用文献

1. Googleが「Nano Banana 2.1」を公開 ～複雑な解説図や歴史的に、
<https://forest.watch.impress.co.jp/docs/news/2146777.html>
2. Dramatic Improvements in Visual Production with GPT Image 2.5,
<https://note.com/npaka/n/n44fed9fb168d?hl=en>
3. Nano Banana 2.1: 機能、ベンチマーク、価格 & アクセスガイド,
<https://www.cometapi.com/ja/what-is-nano-banana-2-1/>
4. Googleが画像生成AI「Nano Banana 2.1」を公開、人物の一貫性や編集機能が向上,
<https://gigazine.net/news/20261007-nano-banana-2-1/>
5. <https://deepmind.google/models/model-cards/nano-banana-2-1/>
6. ChatGPT Image 2.5とは？ Images 2.0からの変更点と新機能Sketch,
<https://chatsense.jp/blog/chatgpt-image-2-5>
7. GPT Image 2.5 | OpenAI's Flare and Sunburst Image Models on fal,
<https://fal.ai/gpt-image-2.5>
8. Image prompting | OpenAI API,
<https://developers.openai.com/api/docs/guides/image-prompting>
9. GPT-Image-2.5 Flare vs Sunburst: Which Model Should You Use?,
<https://zenn.dev/neotechpark/articles/514d034e19f370>
10. Nano Banana 2.1とは？ 画像生成で変わったことや使い方 - AI - note,
https://note.com/kazu_t/n/n977fe5059a03
11. Nano Banana 2.1 AI画像ジェネレーター, <https://nanobanana.io/ja/nano-banana-2-1>
12. GPT Image 2.5 Review: Price, Specs & When to Use | MyClaw.ai,
<https://myclaw.ai/blog/gpt-image-2-5>
13. GPT Image 2.5 Generator & Editor | Flare & Sunburst | Seedance,
<https://www.seedance.tv/gpt-image-2-5>
14. Google ने लॉन्च किया Nano Banana 2.1, अब आधे खर्च में बना सकेंगे शानदार AI तस्वीरें,
<https://bazaar.business today.in/technology/story/google-launches-nano-banana-2-1-with-better-ai-image-generation-and-editing-at-nearly-half-the-previous-cost-1459824-2026-10-07>
15. 【Nano Banana 2.1】画像単価半額のGoogle最新モデルの ... - WEEL,
<https://weel.co.jp/media/tech/nano-banana-2-1/>
16. Pricing | OpenAI API, <https://developers.openai.com/api/docs/pricing>
17. GPT-Image-2.5 Price: API Costs, Cost per Image, Flare vs Sunburst,
<https://www.cometapi.com/gpt-image-2-5-price-api-cost-per-image/>
18. GPT-Image-2.5 Sunburst Model | OpenAI API,
<https://developers.openai.com/api/docs/models/gpt-image-2.5-sunburst>
19. Nano Banana 2.1登場。キャラ固定と部分修正が強化 - AI - note,
https://note.com/oto_wan_ai/n/n145d914ced5a

20. AI画像生成ツール GPT Image 2.5 | Nano Banana,
<https://nanobanana.io/ja/models/gpt-image-2-5>
21. Who Owns AI-Generated Content? Copyright Guide (2026),
<https://astraia.law/insights/generative-ai-copyright-ownership-guide-2025>
22. Generative AI Copyright Japan (2026) - Global Law Experts,
<https://globallawexperts.com/generative-ai-copyright-japan-2026/>
23. AIで生成した作品の著作権はどうなる？2026年最新の法制度・訴訟,
<https://www.ai-souken.com/article/ai-generated-copyright-explanation>
24. Google Cloud Generative AI Indemnified Services,
<https://cloud.google.com/terms/generative-ai-indemnified-services>
25. Google Cloud Terms of Service,
https://workspace.google.com/terms/premier_terms-20260422/
26. The Hidden Limits of AI Indemnification — Managing IP Risk Across,
<https://www.sterneckessler.com/news-insights/insights/the-hidden-limits-of-ai-indemnification-managing-ip-risk-across-the-generative-ai-stack/>
27. Can AI Write a Patent Application? USPTO Rules (2026),
<https://patentprotector.ai/blog/can-ai-write-a-patent-application-uspto-rules-2026>
28. Does Enterprise AI API Data Get Used for Training? Zero Data,
<https://cloudinsight.cc/en/blog/ai-api-data-retention-guide>
29. OpenAI Data Retention Policy 2026 - Meetily, <https://meetily.ai/llm-privacy/openai>
30. フロンティアモデルでゼロデータ保持を提供 - OpenAI,
<https://openai.com/ja-JP/index/offering-zero-data-retention-for-frontier-models/>
31. OpenAI DevDayで発表された「Copyright Shield」について調べてみた,
<https://dev.classmethod.jp/articles/openai-devday-copyright-shield/>
32. OpenAIのゼロデータ保持(ZDR)とは？APIで何が変わるか - Mihata,
<https://mihata.jp/column/openai-zero-data-retention-zdr>
33. The Complete Guide to Patent Drawings (2026) | PatentDrawingAI,
<https://patentdrawingai.com/blog/guide-to-patent-drawings>
34. 特許図面のベクター化 — PNG/JPG を SVG・DXF・PDF に変換 (AI),
<https://patentfig.ai/ja/vectorize>
35. 最良のAI特許作成ツール(2026):10ツール比較、図面機能も掲載,
<https://patentfig.ai/ja/best-ai-patent-drafting-tools>
36. USPTO AI Inventorship Guidance: What Changed in 2026,
<https://thompsonpatentlaw.com/uspto-ai-inventorship-guidance-2026/>
37. Revised USPTO guidance on inventorship for AI-assisted inventions,
<https://academic.oup.com/jiplp/article/21/5/272/8528856>
38. 生成AIで意匠出願用図面を作成することができるのだろうか？,
<https://www.dpdi.jp/post-3376/>
39. The USPTO explores generative AI's role in design patents,
<https://www.uspto.gov/sites/default/files/documents/opia-mar2026-bulletin-ai-design.pdf>
40. 意匠出願・権利化業務における生成 AI の活用の現状と課題,
<https://yorozuipsc.com/uploads/1/3/2/5/132566344/a3737e548a703070248d.pdf>
41. A Practical Guide Based on July 2026 Case Law | あいらぼ - note,

https://note.com/ai_labo26/n/n4795cffaa6d8?hl=en